

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 13 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25289213

研究課題名(和文)世界遺産バッファゾーンの「文化遺産共生地域」としての整備モデル構築のための研究

研究課題名(英文)A Study for Protection of Buffer Zone as Co-existing Environment of World Heritage

研究代表者

山崎 正史(Masafumi, Yamasaki)

立命館大学・理工学部・教授

研究者番号：40109038

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 5,000,000円

研究成果の概要(和文)：京都の世界遺産登録時の既存の景観保護地区を選んだバッファゾーンとは別に、本来のあるべきバッファゾーンを調査を通じ考察した。遺産を守る緩衝地帯としてだけでなく、遺産の歴史的文化的価値を支える周辺環境要素・景観要素として、清水寺では歴史的参道、下鴨神社では神聖な御手洗川の源流水路、西芳寺では沿道庭園を有す集落、醍醐寺では奈良街道の景観などを保全すべきであることを明らかにした。

研究成果の概要(英文)： Buffer zones should compose of areas not only to protect landscape of heritages but also such environmental and scenic components which have historic values in relation with the heritages. We found that each heritage has such elements, such as historic access roads to Kiyomizu temple, a source stream of sacred river of Shimogamo shrine, historic village with gardens on roads near Saiho-ji temple, townscape of historic highway at Daigo-ji temple, etc.
We made it clear that important historic heritages, in most of case, have historic meaningful environments which should be protected within buffer zones.

研究分野：歴史的景観保全

キーワード： 世界遺産 バッファゾーン 歴史的景観 景観保護 歴史的河川 京都

1. 研究開始当初の背景

世界遺産登録には、中心となる文化遺産の周辺をバッファゾーンとして保護する制度が整備されていることが条件となっている。しかし、京都など初期の登録申請時は日本にバッファゾーン保護の概念がなかったため、不十分な制度で登録された。それを見直し、本来あるべき姿でバッファゾーンの指定と保護を図る必要が生じている。

2. 研究の目的

(1) バッファゾーンとは緩衝地帯であり、遺産を守るための犠牲的規制地区と世界的に考えられているが、その他に、遺産と歴史的に共存してきた周辺地域があり、それら「文化遺産共生地域」の保全と共存関係維持があるべきだと考えられる。それを確かめ、実際にはそれがどのようなものであるのか明らかにする。

(2) 上の結果をふまえ、日本において、バッファゾーンとして保護すべき対象と地区指定の方法、および、保護制度のありかたを考察し、バッファゾーン整備手法の1モデルを構築する。

3. 研究の方法

(1) 世界遺産「古都京都の文化遺産」に登録された社寺の周辺地域を研究対象とする。それらを4つの研究視点 周辺集落の地域史 眺望景観（寺院を眺める景観、寺院からの眺望） 参道および周辺集落の景観 地域コミュニティとの関係 から研究を進める。
 (2) 社寺を4つの立地特性<山腹・都市周辺部><山麓・郊外><平坦地・都心部><平坦地・都市周辺部>に分類し、立地特性ごとに上記4視点から研究を行う。それによって、京都での研究成果から汎用性のある結論を導く。

4. 研究成果

(1) まず、立地特性に対応した社寺研究のうち、顕著な知見を示す。

<山腹・都市周辺部> 清水寺を対象として研究した。

古来3つの参道があり、注目すべき参道の門前町がある。平安時代以来、寺院と元の五条大橋を結ぶ清水道が参道としてあり、中世末の「清水寺曼荼羅」にこれが含まれており、寺院を構成する空間として参道の重要性を示している。その後、江戸時代から明治にかけて、産寧坂から八坂神社に至る参道、付け替えられた五条大橋からの参道、最後に清水道が明治期に、それぞれ家並みが出来、発展した。これらの参道はそれぞれに伝統的町並みが見られ、鴨川に至る参道景観を、バッファゾーンの核となる要素として保護が望ましい。(図1)

(2) <山麓・郊外> 竜安寺、西芳寺 を対象

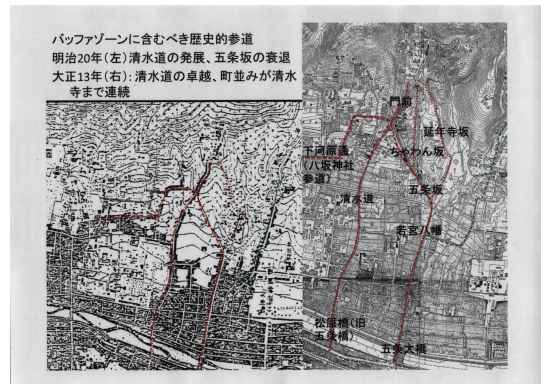


図1 清水寺バッファゾーンの要素として景観保全すべき歴史的参道

として研究した。竜安寺では、京の町から仁和寺街道が仁和寺、竜安寺、さらに嵯峨へ至る参道の役割を果たしており、街道沿いに「都名所図会」に登場する社寺や、町家が点在し、家屋の中に塀の外に庭園を設ける事例があり、参道としての特別な道景観が見られる。寺院周辺だけでなく、街道を復興し新しい観光歩行者道とバッファゾーンの一体的整備というテーマが浮かび上がった。

西芳寺では、月読神社・華厳寺・西芳寺・地蔵院・浄住寺の4社寺が山麓に並んで位置し、その景観構成は「都名所図会」にも描かれている。これらを結ぶ古道が保存されており、道沿いに歴史的集落景観があり、塀の外の作り庭(「みち庭」と命名)が見られる。これらが見られるのは各社寺からおおよそ500m圏内であり、これをバッファゾーンとすべきである。古道の保存整備、伝統的集落景観保全、みち庭の保護などが景観保護の内容となるべきである。(図2)



図2 西芳寺周辺に提言するバッファゾーン案(黄色部分)

(3) <平坦地・都心部> 教王護国寺、下鴨神社を研究対象とした。

教王護国寺は20世紀中頃まで周辺は田園地帯で、門前町らしい町並みも形成されてこなかった。そのため、都市計画は周辺を業務地化を想定しており、高さ規制も緩い。境内の隣地にネオンが見え、京都駅南の開発予定地域のビルが将来境内から見えると予想できる。境内からの距離と高さに応じた眺望景

観ガイドラインが必要である。(図3)

周辺には伝統的町並みがおよそ存在しない。また、中高層のビル建設が予想される。新しいビルに応じ、かつ寺院周辺に相応しい和風デザインガイドライン案を作成した。

■ 眺望保全等高線との(教王護国寺)

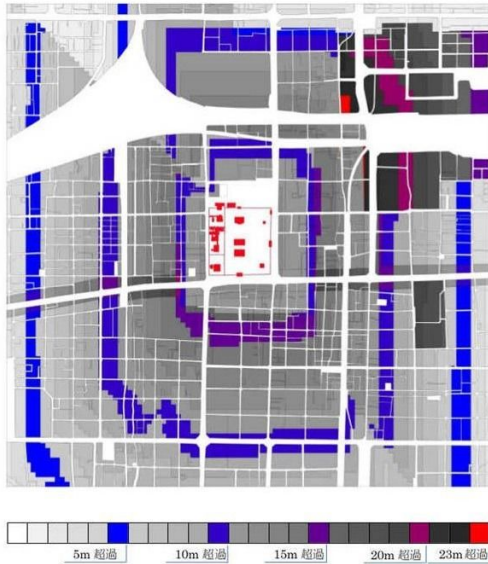


図3 教王護国寺周辺で現行高度規制で予想される境内からの可視壁面高さ

下鴨神社では、境内を流れる神聖な水である泉川の源流の保護問題を発見した。江戸時代初期の絵図では、上賀茂神社から下鴨神社へ結ぶ川があった。やがて松ヶ崎村から出る水流が合流し、上賀茂神社起源の川は植物園建設で断絶された。現在は松ヶ崎村起源の川がコンクリート三面張りで住宅街を流れている。世界遺産を守るためには、河川の水源保護という課題がある。景観的にも風格ある河川景観とすべきであろう。バッファゾーンの要素とすべきである。(図4)



図4 下鴨神社の泉川の源流として保全されるべき水流

下鴨神社はまた「葵祭」の神社であり、上賀茂神社まで、祭礼の巡行路両側の景観保護が行われるべきである。

糺の森が近代の道路建設によって分断されていたために、その一角がコアゾーンでなくバッファゾーンとなっていたために、マンションが建設中である。神社維持の予算不足という経済的課題とともに、コアゾーン自身の登録範囲の問題性も浮上した。

(4) <平坦地・都市周辺部> 醍醐寺を研究対象とした。

醍醐寺では門前を旧奈良街道が通り、寺院周辺で街道沿いに醍醐寺村の町並みがある。民家形式には農家型と町家型があり、前者は塀を巡らせて邸宅型景観を示している。保存されている町家は、表側に塀のような土壁壁面を有し、側面で開口している。「醍醐型町家」と命名した。醍醐寺から500mを越えて醍醐型町家が存在する。この範囲までバッファゾーンと指定して景観保全をはかるべきであろうまた、寺院正面側に地下鉄東西線の醍醐駅があり、これと寺院を結ぶ新道を、世界遺産への新参道として修景計画を作成すべきであり、提案ガイドラインを作成した。

(5)眺望景観保護

「周辺集落の地域史」と「参道および周辺集落の景観」については(1)~(4)に記述したので、ここで「眺望景観に関する研究結果を報告する。

清水寺：仁王門および西門、舞台、奥の院の3箇所から、京都市街地を広く眺望する景観があり、清水寺の魅力の一つを構成している。特に西門は境内側から門を通して西方浄土を拝むという言い伝えがあり、重要である。

しかし、広い範囲の市街地を見下ろすというタイプの眺望景観コントロール手法はこれまでのところ国内国外とも見られない。その研究は今後の課題である。視点場からの距離と、そこで認知される建築属性との関係を研究した。こうしたデータを元に、距離に応じた建築デザインコントロールを作成してゆく必要がある。(図5)

清水寺は仁王門・西門と三重塔が東側の鴨川付近から東山を背景に見える眺望景観がある。京都駅からは本堂も眺望される。しかし、公共的な視点場は五条通のみくらいで、他は私的な視点場である。これを守るべきかどうかの議論を始める必要がある。駅やデパート、ホテルなどを準公共的視点場として設定する考え方もある。

教王護国寺(東寺)は前述の通り、境内から望む眺望景観に大きな問題を抱えている。境内の東に京都駅南地区があり、ビル開発の圧力が高まっている。また、東寺五重塔を望む眺望景観保護も課題である。

その他の社寺に関しては、周辺地域は高さ規制が厳しく、特に問題は見られなかった。

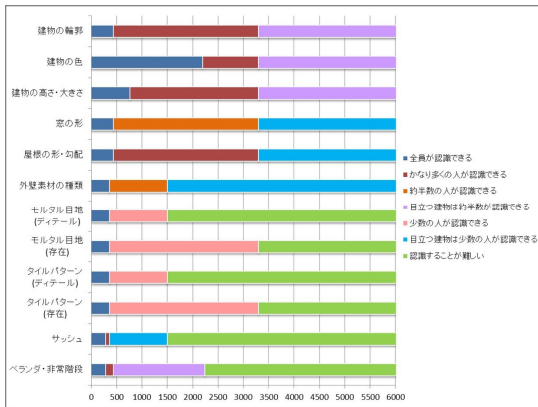


図5 視点場からの距離による認知される建築属性(下目盛り=視点場からの距離)

(6)バッファゾーン設定のモデル

世界遺産「古都京都の文化財」のバッファゾーンに関する調査研究から得られたバッファゾーン設定のモデル手順は次の通りである。

文献調査：各種地域史資料、絵画史料により、歴史的参道、門前町、周辺集落の位置を明らかにする。文化遺産周辺地域の景観史と、重要な景観イメージを求める。景観に限らず、境内環境を支える水源や生態にも留意する。

眺望景観：境内から見える眺望景観と、境内を眺める眺望景観を調査し、保護をはかる。市街地を見下ろす眺望景観のコントロール手法を開発する課題がある。

参道および周辺集落の景観：文献調査を通じて明らかにした地域の景観調査を行う。歴史的建造物、民家、町並みの意匠的特質を明らかにし、保全地区を設定し、また新しい建物のデザインガイドラインの基礎データとする。

参道に関しては広域に調査する。広域散策路整備の可能性をさぐる。

景観だけでなく、前述の水源、生態系にも留意する。

地域コミュニティとの関係：景観と環境整備に向けて、隣接地域の住民との協働関係構築を図る。

以上のような手順から浮かび上がるのは、平面的で一意的なバッファゾーンではなく、各視点項目ごとに異なる重層的なバッファゾーンである。今後も引き続き、バッファゾーン設定とコントロール手法と制度の研究推進が望まれる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 5件)

山口祐史、青柳憲昌、国有林野法による京都府社寺上地林の境内編入と古社寺保存、日本建築学会大会、東海大学(神奈川県)、2015年9月4

日
仲隆裕、磯貝恭平、世界文化遺産「古都・京都の文化財」のバッファゾーン保全に関する調査 龍安寺の境内について、日本庭園学会関西大会、京都産業大学(京都府)、11月29日

Masafumi YAMASAKI, Zentaro YAGASAKI, Naoko ITAYA, Takahiro NAKA, CONTROL OF BUFFER ZONE OF CULTURAL MONUMENTS THROUGH INTRPRETATION OF HISTORIC LANDSCAPE, ICOMOS General Assembly, Florence(Italy), 11 November, 2014

板谷直子、山崎正史、矢ヶ崎善太郎、東寺(教王護国寺)および下鴨神社(賀茂御祖神社)のバッファゾーンの景観保全に関する研究、日本建築学会大会、神戸大学(兵庫県)、2014年9月13日

山崎正史、矢ヶ崎善太郎、板谷直子、バッファゾーン保護の考え方と清水寺参道について、日本建築学会大会、神戸大学(兵庫県)、2014年9月13日

6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 正史(MASAFUMI, Yamasaki)
立命館大学・理工学部・教授
研究者番号: 40109038

(2)研究分担者

板谷 直子(ITAYA, Naoko)
立命館大学・衣笠総合研究機構・准教授
研究者番号: 90399064

矢ヶ崎 善太郎(YAGASAKI, Zentaro)
京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・准教授
研究者番号: 90314301

仲 隆裕(NAKA, Takahiro)
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号: 20237192

青柳 憲昌(AOYAGI, Norimasa)
立命館大学・理工学部・任期制講師
研究者番号: 00514837